

各関係機関の長 殿

鹿児島県病虫害防除所長

令和4年度病虫害発生予察情報について

このことについて、発生予報第2号（5月）を発表したので送付します。

鹿児島県病虫害防除所

〒899-3401

南さつま市金峰町大野 2200

TEL 099-245-1081 (代表)

099-245-1157 (直通)

099-245-1149 (FAX)

テレホンサービス

鹿児島 099-296-6430

296-6431

ホームページアドレス：<http://www.jpjn.ne.jp/kagoshima>

メールアドレス：nousou-boujo@pref.kagoshima.lg.jp



農薬の安全使用に努めましょう

農薬安全使用五つの柱

1. 使用する人の安全 使用者自身の健康管理，安全使用
2. 作物に対する安全 適期，適正防除で薬害防止
3. 農産物に対する安全 消費者へ安全な農産物を供給
(農薬安全使用基準の遵守)
4. 環境に対する安全 周辺環境への影響防止
(周辺住民等への危被害防止)
(河川，湖沼，海などへの汚染防止)
(養蚕，養蜂などへの危被害防止)
5. 保管管理の安全 保管管理の徹底で事故防止

農薬ラベルを確認しましょう

農薬の飛散（ドリフト）にも注意しましょう

令和4年度 病虫害発生予報 第2号

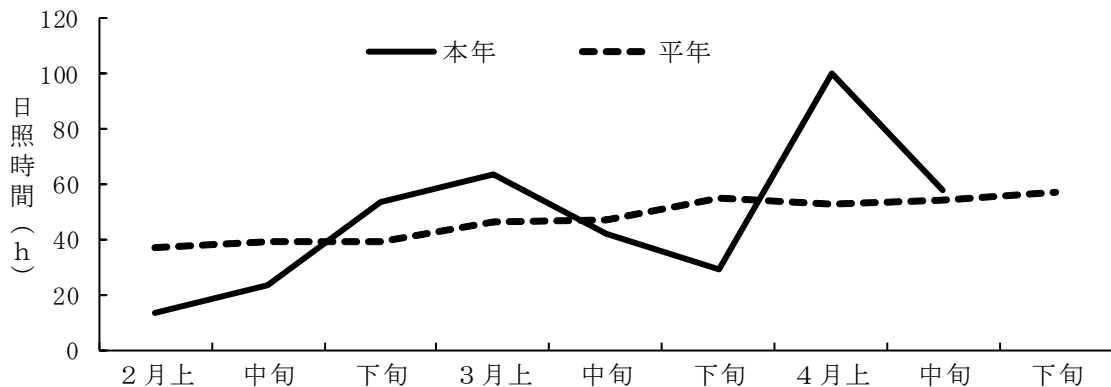
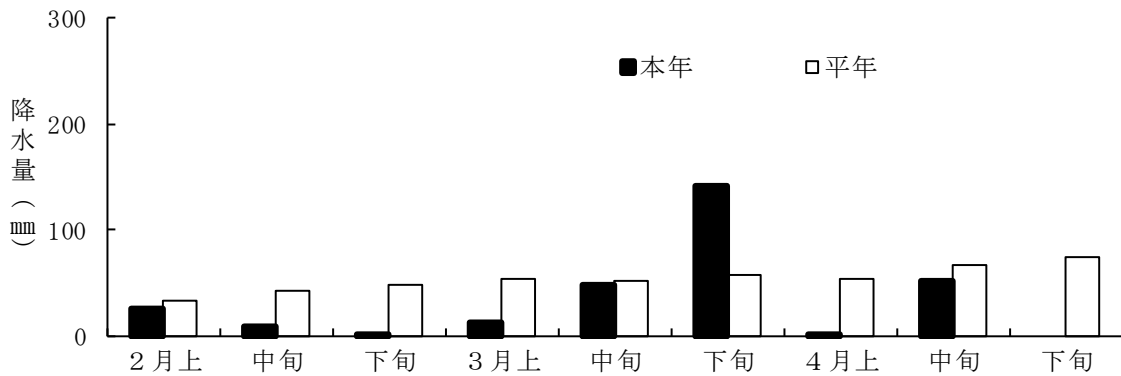
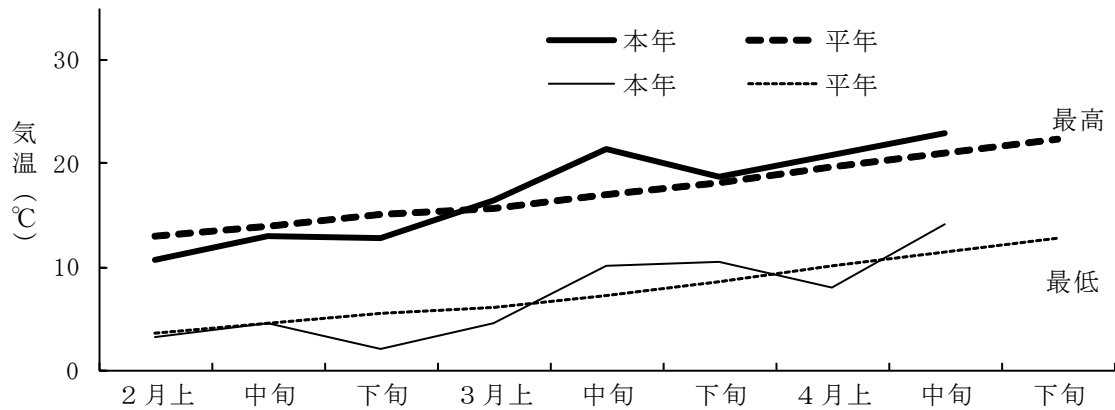
令和4年4月26日
鹿児島県病虫害防除所

【気象概況】

I. 向こう1か月の予報（4月23日から5月22日） 令和4年4月21日 鹿児島地方气象台 発表

要素	地域	確率（％）			概要
		低い(少ない)	平年並	高い(多い)	
気温	九州南部	10	30	60	九州南部では、気温は平年より高く、降水量は多く、日照時間は少ない見込み。奄美地方では、気温は高く、降水量と日照時間は平年並みの見込み。
	奄美地方	10	30	60	
降水量	九州南部	20	30	50	
	奄美地方	30	30	40	
日照時間	九州南部	50	30	20	
	奄美地方	40	30	30	

II. 1～4月の気象情報（鹿児島地方气象台 観測点：加世田）



【病害虫発生予報の概要】

作物		病害虫名	発生量		
			現況	予報	
普通作物	早期水稲	葉いもち	並	並	
野菜	トマト	灰色かび病	並	やや多	
		うどんこ病	多	多	
	ピーマン	斑点病	少	やや少	
		うどんこ病	多	多	
		アザミウマ類	多	多	
花き	キク（施設）	ハダニ類（県本土）	多	多	
		アザミウマ類（県本土）	やや多	多	
果樹	カンキツ	そうか病（県本土・熊毛地域）	やや少	並	
		〃（奄美地域）	並	並	
		かいよう病（県本土・熊毛地域）	やや少	並	
		〃（奄美地域）	並	並	
	ナシ	ナシ	ミカンハダニ（県本土・熊毛地域）	並	並
			〃（奄美地域）	並	やや多
			黒星病	並	やや多
			アブラムシ類	やや多	並
茶樹	チャ	チャノコカクモンハマキ	やや少	やや少	
		チャハマキ	やや多	やや多	
		チャノホソガ	並	並	
		チャノミドリヒメヨコバイ	並	並	
		チャノキイロアザミウマ	やや少	やや少	
		カンザワハダニ	並	並	
		クワシロカイガラムシ	並	並	

【 病 害 虫 発 生 予 報 】

I. 普通作物

1. 早期水稲

(1) 葉いもち

ア 予報内容

(ア) 発生地域 県内全域

(イ) 発生量 並

イ 予報の根拠

(ア) 調査結果 発生量：並

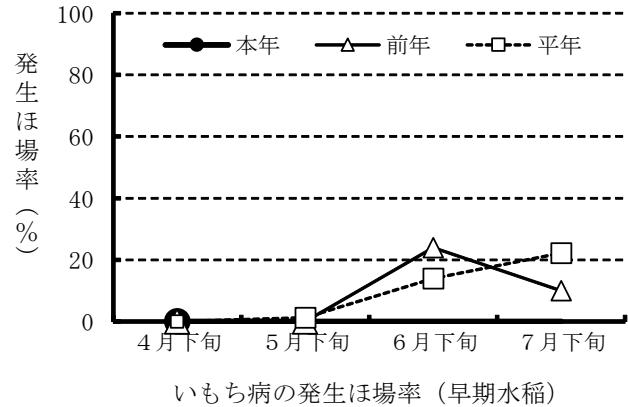
発生ほ場率0%（平年0%）：並

ウ 防除上注意すべき事項

(ア) 本病の常発地や前年の多発ほ場では発生に注意し、発生を認めたら直ちに防除を行う。

(イ) 置き苗は発生源となることが多いので、補植後、速やかに処分する。

(ウ) 窒素肥料の多施用は発生を助長するので、避ける。



防除に関する今月の留意事項

1. サツマイモ基腐病（令和3年度技術情報第22号（3月25日付け）参照）

4月末現在、一部の育苗ほにおいて発生が確認されていることから、被害の拡大を抑えるため、以下の防除対策を徹底する。

<採苗>

(1) 採苗時に用いるハサミは、こまめに消毒（火炎滅菌または丁寧な水洗と拭き取り）する。

(2) 採苗は、株の地際から5cm以上切り上げて行う。

(3) 苗消毒は、必ず採苗当日に行う。なお、消毒液は必ず使用する当日に調整したものを用いる。

<本ぼ>

(1) 排水が不良なほ場では、植付前に耕盤破碎（地下排水の促進）や明渠の施工（表面排水の促進）などの対策を行う。定植前にはほ場の排水機能（明渠等）とほ場に隣接する排水路の点検を必ず実施し、ほ場からの排水口は排水路に確実に接続する。

(2) 発病株は見つけ次第除去して、その周辺株には銅剤を散布する。苗消毒による感染防止効果が低下する定植5週目頃に、予防・殺菌効果のある剤を散布する。

サツマイモ基腐病の生態と防除に関する詳しい情報は、鹿児島県 (https://www.pref.kagoshima.jp/ag05/sangyo-rodo/nogyo/gizyutu/taisaku/documents/70898_20220327104043-1.pdf), 農研機構 (https://www.naro.go.jp/publicity_report/publication/files/stem_blight_and_storage_tuber_rot_of_sweetpotator03.pdf) をご覧ください。



鹿児島県

サツマイモ基腐病防除
対策マニュアル(第3版)



農研機構

サツマイモ基腐病の
発生生態と防除対策
(令和3年度版)

Ⅱ. 野菜

1. トマト

(1) 灰色かび病

ア 予報内容

- (ア) 発生地域 県本土
- (イ) 対象作型 促成栽培
- (ウ) 発生量 やや多

イ 予報の根拠

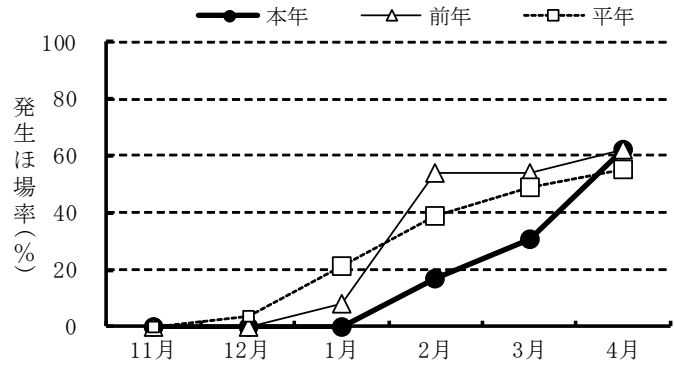
- (ア) 調査結果 発生量：並
発生ほ場率62%（平年55%）：並

(イ) 気象予報

降水量：多い（+）

ウ 防除上注意すべき事項

- (ア) ハウスの通風換気を十分に行ない、過湿にならないよう努める。
- (イ) 果実部やへたの付近に付着する花卉は本病の発生源となるので、こまめに除去する。
- (ウ) 発病葉や発病果実はビニール袋等に入れてほ場外へ持ち出し、適切に処分する。
- (エ) 同一系統薬剤の連用を避け、作用性の異なる薬剤のローテーション散布を行う。



灰色かび病の発生ほ場率 (トマト)

(2) うどんこ病

ア 予報内容

- (ア) 発生地域 県本土
- (イ) 対象作型 促成栽培
- (ウ) 発生量 多

イ 予報の根拠

- (ア) 調査結果 発生量：多
発生ほ場率46%（平年31%）
：高い（+）

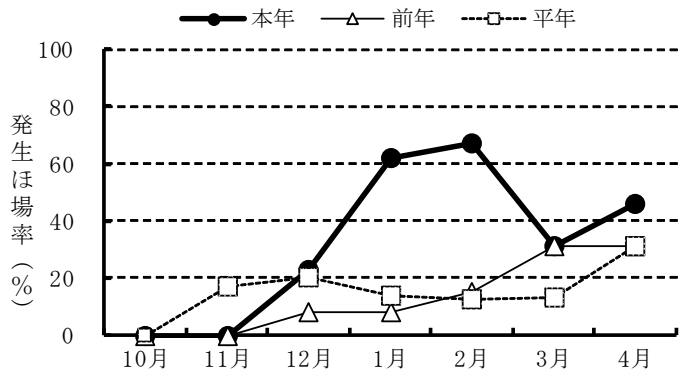
(イ) 気象予報

気温：高い（+）

降水量：多い（-）

ウ 防除上注意すべき事項

- (ア) 通風採光をよくし、老化葉は除去に努める。
- (イ) 多発すると防除が困難になるので、早めに防除する。
- (ウ) 薬剤は葉裏に十分かかるよう散布する。
- (エ) 同一系統薬剤の連用を避け、作用性の異なる薬剤のローテーション散布を行う。



うどんこ病の発生ほ場率 (トマト)

2. ピーマン

(1) 斑点病

ア 予報内容

- (ア) 発生地域 県本土
- (イ) 対象作型 促成栽培
- (ウ) 発生量 やや少

イ 予報の根拠

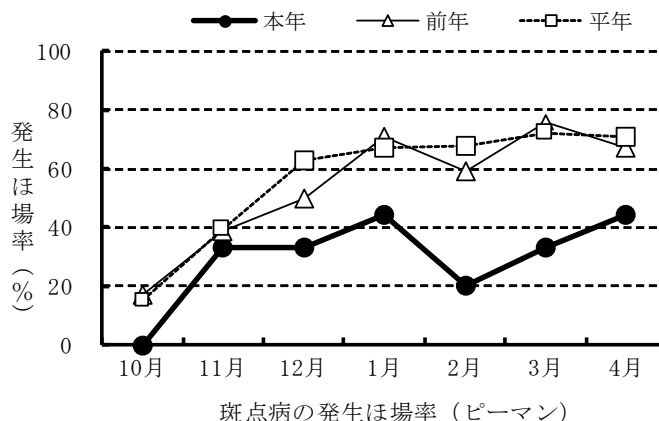
- (ア) 調査結果 発生量：少
発生ほ場率44%（平年71%）
：低い（-）

(イ) 気象予報

- 気温：高い（+）
- 降水量：多い（+）

ウ 防除上注意すべき事項

- (ア) 多湿条件下で発生しやすいので、ハウス内の通風換気に努める。
- (イ) 発病葉はできるだけ持ち出して処分し、菌密度の低下を図る。
- (ウ) 成り疲れなどによる草勢低下により発生しやすいので、適正な肥培管理に努める。
- (エ) 多発すると防除が困難になるので、初期防除に努める。
- (オ) 同一系統薬剤の連用を避け、作用性の異なる薬剤のローテーション散布を行う。



(2) うどんこ病

ア 予報内容

- (ア) 発生地域 県本土
- (イ) 対象作型 促成栽培
- (ウ) 発生量 多

イ 予報の根拠

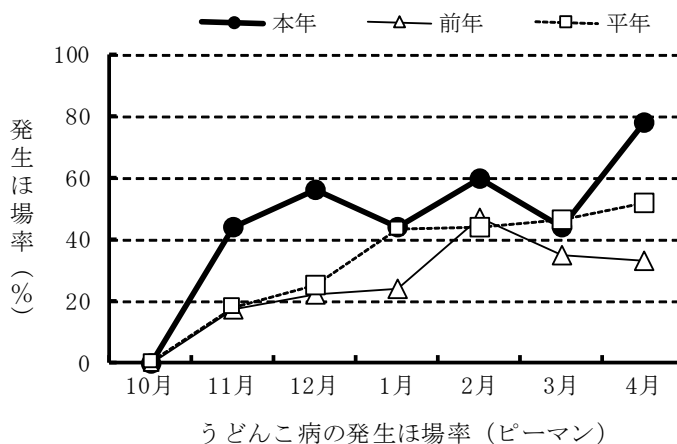
- (ア) 調査結果 発生量：多
発生ほ場率78%（平年52%）
：高い（+）

(イ) 気象予報

- 気温：高い（+）
- 降水量：多い（-）

ウ 防除上注意すべき事項

- (ア) 発病葉は早めに除去し、ハウス外に持ち出して処分する。
- (イ) 草勢低下は発生を助長するので適正な肥培管理に努める。
- (ウ) 薬剤は下位葉や葉裏に十分かかるよう散布する。
- (エ) 同一系統薬剤の連用を避け、作用性の異なる薬剤とのローテーション散布を行う。



(3) アザミウマ類

ア 予報内容

- (ア) 発生地域 県本土
- (イ) 対象作型 促成栽培
- (ウ) 発生量 多

イ 予報の根拠

- (ア) 調査結果 発生量：多
発生ほ場率67%（平年43%）

：やや高い（+）

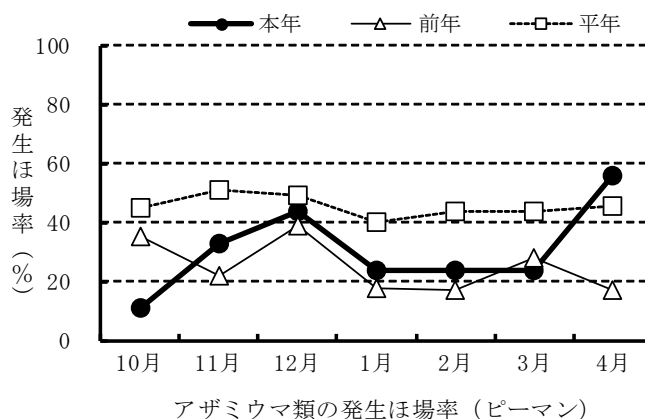
発生程度の高いほ場を認めた（+）

(イ) 気象予報

気温：高い（+）

ウ 防除上注意すべき事項

- (ア) 巡回調査の結果では主な発生種はヒラズハナアザミウマであったが、今後、ミナミキイロアザミウマが発生する場合もある。
- (イ) カブリダニ類等の天敵を放飼しているほ場では、天敵に影響の少ない薬剤を選択する。また、多発したほ場ではリセットを考慮した防除を行う。
- (ウ) 被害果が確認されるようになったほ場では直ちに防除を行う。
- (エ) 花や新芽の中など、薬剤のかかりにくい場所に生息するので、薬剤散布は丁寧に行う。
- (オ) ハウスの開口部等に青色粘着トラップを設置し、早期発見と早期防除に努める。



防除に関する今月の留意事項

1. トマト黄化葉巻病 (TYLCV), キュウリ/メロン退緑黄化病 (CCYV), キュウリ/メロン黄化えそ病 (MYSV)

病原ウイルスはタバココナジラミやミナミキイロアザミウマにより媒介される。今後これら媒介虫の活動が活発となり、ウイルスを保毒した成虫がハウスの外に飛び出すので、以下の防除対策を徹底する。

- (1) 媒介虫がハウス外への飛び出しを防ぐため、栽培終了まで防除を徹底するとともに、防虫ネットは継続して設置しておく。
- (2) 栽培終了後は抜根し、植物が十分枯死するまで、必ず蒸し込む。

2. イチゴのハダニ類

<本ぼ>

栽培終了後の本ぼから苗床への侵入を防ぐために、以下の防除対策を徹底する。

- (1) ハウス外への拡散を防ぐため、栽培終了まで防除を徹底する。
- (2) 薬剤感受性の低下を防ぐため同一系統薬剤の連用を避け、気門封鎖剤など作用性の異なる薬剤のローテーション散布に努める。
- (3) 栽培終了後は抜根し、ハウスを確実に密閉して、植物が十分枯死するまで、必ず蒸し込む。

<苗床>

本ぼでの発生は苗からの持ち込みによることから、苗床での防除を十分に行う必要があるので、以下の防除対策を徹底する。

- (1) 気温の上昇とともに急激に増殖するので、管理作業時に注意深く観察し、初期防除に努める。
- (2) 寄生葉や摘葉した葉は、ほ場外に持ち出し処分する。
- (3) 薬剤の防除効果を高めるため、下葉かきを行ってから、葉裏にかかるよう丁寧に散布する。
- (4) 同一系統薬剤の連用を避け、作用性の異なる薬剤とのローテーション散布に努める。

3. イチゴ炭疽病<苗床>

イチゴ炭疽病は風雨や灌水のはね上がりにより感染が広がる。また、気温の上昇に伴い発生が多くなり、5月上旬から感染好適期となる。健全な苗を確保するため、以下の防除対策を徹底する。

- (1) 雨よけ、排水対策及び防風対策を徹底する。灌水はできるだけ水滴が小さくなる灌水チューブ等を用い、適正な水管理に努める。
- (2) 古葉は潜在感染している場合が多いので、新葉展開後は降雨時を避けて摘葉する。
- (3) 生育不良の親株や萎凋した苗は、早急に除去し、ほ場外で適切に処分する。
- (4) 薬剤による予防散布は10～14日間隔で行い、株元、ランナー、葉裏などに十分量を散布する。発生が認められた場合は散布間隔を短縮する。
- (5) 地床育苗では、ビニールマルチ等で降雨等による土のはね返りを防止する。
- (6) 育苗ほ場周辺や育苗ベンチ下の除草を徹底する。

4. アブラナ科野菜収穫後の耕種的病害対策（アブラナ科野菜根こぶ病）

次作での発生を抑えるため、以下の総合的な防除対策に努める。

- (1) トラクター等の作業機がほ場に入出入りする付近で発生しやすいので、出入口付近で生育不良や凋れを生じる株は引き抜き、根にこぶ状のものがいないかを目視で確認する(図1)。根にこぶ状のものを確認した場合は本病の発生が考えられるので、最寄りの各地域振興局・支庁の農政普及課もしくは病害虫防除所に連絡する。
- (2) 発生ほ場ではブロッコリーの作付は行わず、キャベツやハクサイ等は抵抗性品種を利用する。
- (3) 発生ほ場では作業機械等による汚染土壌の持ち出しを防ぐため、作業機械に付着した土を丁寧に洗い落とす。また、発生ほ場の管理を最後にするなど、汚染土壌の移動を避ける。

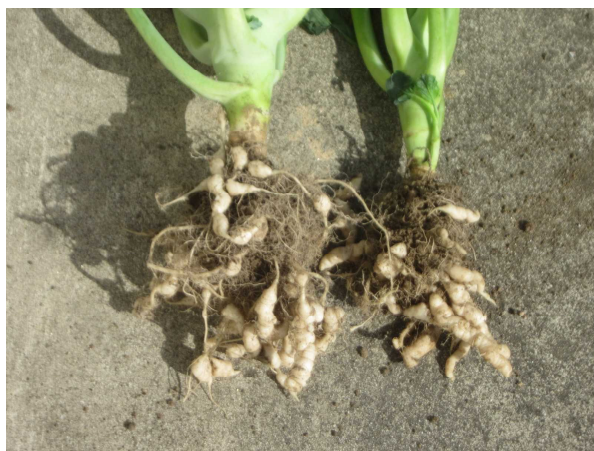


図1 ブロッコリーにおける発病株の状況

(北薩地域振興局農政普及課出水市駐在提供)

本病の生態と防除に関する詳しい情報は、鹿児島県の総合対策マニュアル (http://www.pref.kagoshima.jp/ag11/pop-tech/nenndo/documents/81833_20200611095436-1.pdf) をご覧ください。



5. バレイシヨの収穫後の耕種的病害対策（令和3年度技術情報第21号（3月18日付け）参照）

収穫残さが次作での疫病，菌核病，軟腐病及びそうか病等の一次伝染源になるので，収穫後は以下のほ場管理を適切に行う。

- （1）収穫後の発病茎葉や屑いも等は，ほ場外に持ち出し，適切に処分する。
- （2）疫病，菌核病の発生が多く，残さの持ち出しが困難なほ場では，天地返しにより残さを土中深く埋没させ，次作にイネ科牧草，サトウキビ等の輪作を行う。

6. その他野菜等の残さ処理について

露地野菜等の残さは，菌核病や軟腐病をはじめ，次作に対して様々な病害虫の伝染源（発生源）になるので，収穫終了後は速やかに残さ処理を行う。

- （1）発病茎葉・果実を含め，収穫後の残さは，ほ場外に持ち出し，適切に処分する。
- （2）ほ場外へ残さの持ち出しが困難なほ場では，複数回の耕耘により残さの分解を促す。

Ⅲ. 花き（キク）

(1) ハダニ類

ア 予報内容

(ア) 発生地域 県本土（施設）

(イ) 発生量 多

イ 予報の根拠

(ア) 調査結果 発生量：多

発生ほ場率40%（平年23%）

：高い（+）

(イ) 気象予報

気温：高い（+）

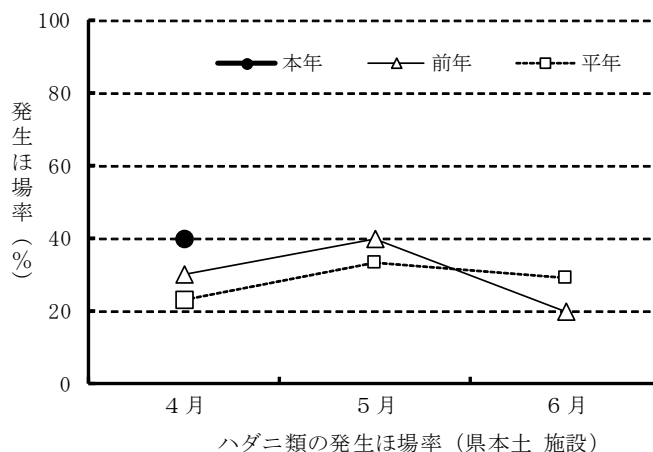
ウ 防除上注意すべき事項

(ア) 出入口や前作での発生場所近く等でスポット状に発生する機会が多いので、ほ場全体をよく見回り、早期発見と初期防除に努める。

(イ) ほ場内と周辺の雑草や収穫後の残さ等は早めに除去し、適正に処分する。

(ウ) 薬剤は葉裏までよくかかるように十分量を散布する。

(エ) 同一系統薬剤の連用を避け、作用性の異なる薬剤のローテーション散布を行う。



(2) アザミウマ類

ア 予報内容

(ア) 発生地域 県本土（施設）

(イ) 発生量 多

イ 予報の根拠

(ア) 調査結果 発生量：やや多

発生ほ場率40%（平年23%）

：高い（+）

発生程度は低い（-）

(イ) 気象予報

気温：高い（+）

ウ 防除上注意すべき事項

(ア) アザミウマ類はキクえそ病(TSWV)、キク茎えそ病(CSNV)を媒介するので、ほ場への侵入防止と早期発見および早期防除に努める。

(イ) 母株や苗の導入に際しては、アザミウマ類の寄生やウイルス感染に細心の注意を払う。

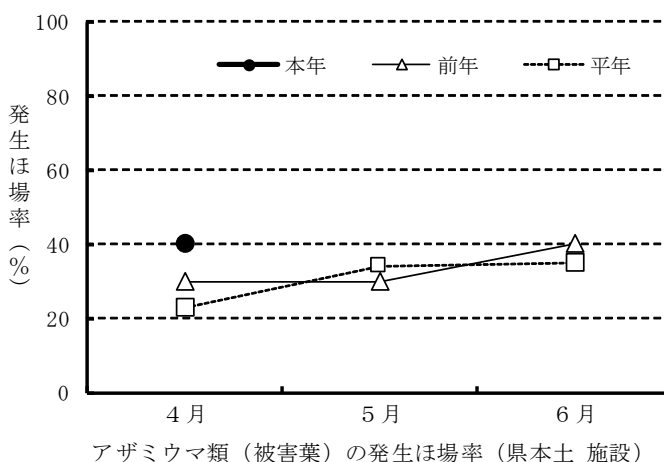
(ウ) 施設では開口部に目合い0.6mm以下の防虫ネットを張る。発生動向を把握するためには出入口や開口部付近での青色粘着シートの設置が有効である。

(エ) 除草等の環境整備を行うとともに、母株の防除を徹底する。

(オ) 同一系統薬剤の連用を避け、作用性の異なる薬剤のローテーション散布を行う。

(カ) クロゲハナアザミウマは中下位葉にも寄生しているため、薬剤は下葉の葉裏までかかるよう丁寧に散布する。

(キ) 栽培終了後は、速やかに残さ渣を処分する。



IV. 果 樹

1. カンキツ

(1) そうか病

ア 予報内容

(ア) 発生地域 県内全域

(イ) 発生量

県本土・熊毛地域 並

奄美地域 並

イ 予報の根拠

<県本土・熊毛地域>

(ア) 調査結果(春葉) 発生量：やや少

発生ほ場率 0% (平年 2%)：やや低い(－)

(イ) 気象予報

降水量：多い(+)

<奄美地域>

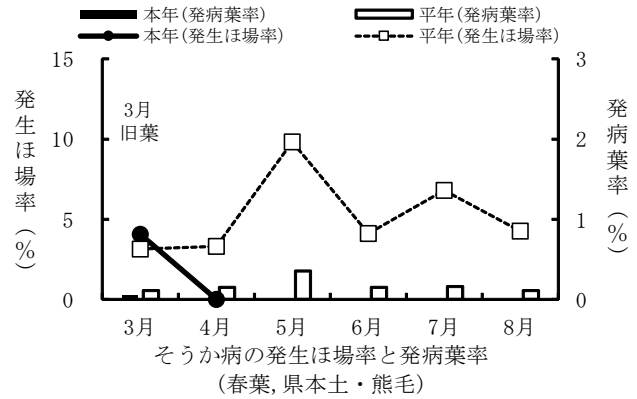
(ア) 調査結果(春葉) 発生量：並

発生ほ場率 0% (平年 9%)：並

ウ 防除上注意すべき事項

(ア) 落花期の防除適期を逸しないように努める。

(イ) 開花期以降のデランフロアブルとマシン油乳剤の近接散布は薬害を生じる恐れがあるので、間隔は30日以上あける。



(2) かいよう病

ア 予報内容

(ア) 発生地域 県内全域

(イ) 発生量

県本土・熊毛地域 並

奄美地域 並

イ 予報の根拠

<県本土・熊毛地域>

(ア) 調査結果(春葉) 発生量：やや少

発生ほ場率 0% (平年 5%)

：やや低い(－)

旧葉(3月) 発生ほ場率 8% (平年 27%)：低い(－)

(イ) 気象予報

気温：高い(+)

降水量：多い(+)

<奄美地域>

(ア) 調査結果(春葉) 発生量：並

発生ほ場率 0% (平年 4%)：並

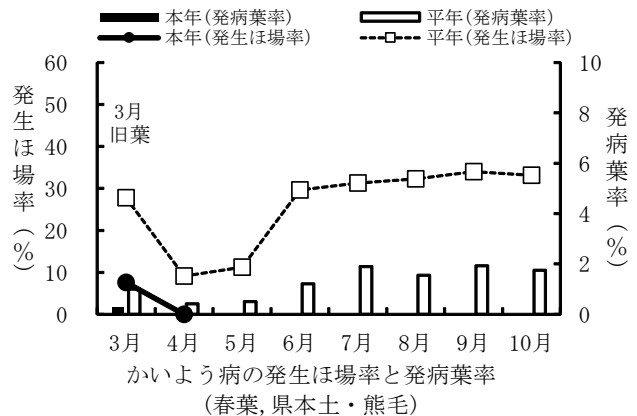
(イ) 気象予報

気温：高い(+)

ウ 防除上注意すべき事項

(ア) 強風雨等による葉や果実への傷口発生を防ぐため、防風林、防風樹の管理に努める。

(イ) 春葉が硬化する前までに予防散布に努める。



(ウ) 銅水和剤の使用にあたっては、薬害を軽減するために炭酸カルシウム剤を必ず加用する。

(3) ミカンハダニ

ア 予報内容

(ア) 発生地域 県内全域

(イ) 発生量

県本土・熊毛地域 並

奄美地域 やや多

イ 予報の根拠

<県本土・熊毛地域>

(ア) 調査結果(春葉) 発生量：並

発生ほ場率 8% (平年 6%)：並

(イ) 気象予報

気温：高い(+)

降水量：多い(-)

<奄美地域>

(ア) 調査結果(春葉) 発生量：並

発生ほ場率 14% (平年 11%)：並

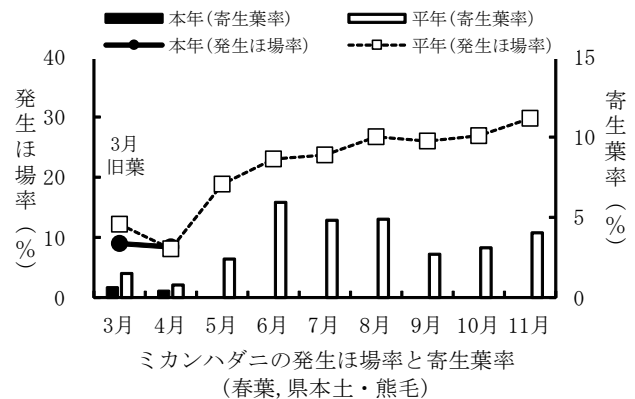
(イ) 気象予報

気温：高い(+)

ウ 防除上注意すべき事項

(ア) 1葉当たり雌成虫数0.5~1.0頭(寄生葉率で30~40%)を目安に防除する。

(イ) 薬剤抵抗性が発達しやすいので、春期~夏期にかけては、マシン油乳剤(97%)を主体とした防除を行う。



2. ナシ

(1) 黒星病

ア 予報内容

(ア) 発生地域 県本土

(イ) 発生量 やや多

イ 予報の根拠

(ア) 調査結果(葉) 発生量：並

発生ほ場率(葉) 0% (平年 10%)

: 並

発病葉率(葉) 0% (平年0.2%)

: 並

発生ほ場率(果実)38% (平年 4%)

: 高い(+)

発病果率(果実)0.5% (平年0.1%)

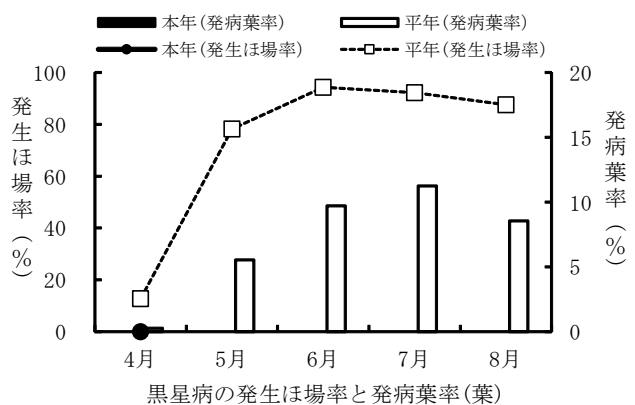
: 高い(+)

(イ) 気象予報

降水量：多い(+)

ウ 防除上注意すべき事項

(ア) 病原菌は春先の降雨で伝搬され、葉や果実が感染すると2~3週間の潜伏期間を経て発病する。



- (イ) 防除は新梢伸長期までを重点に、約10～14日間隔で降雨前に予防散布を行う。
- (ウ) 耐性菌の発生リスクが高まるので、同一系統薬剤（DMI剤等）の連用を避け、作用性の異なる薬剤のローテーション散布を行う。

(2) アブラムシ類

ア 予報内容

- (ア) 発生地域 県本土
- (イ) 発生量 並

イ 予報の根拠

- (ア) 調査結果 発生量：やや多
発生ほ場率 25%（平年 7%）
：高い（+）

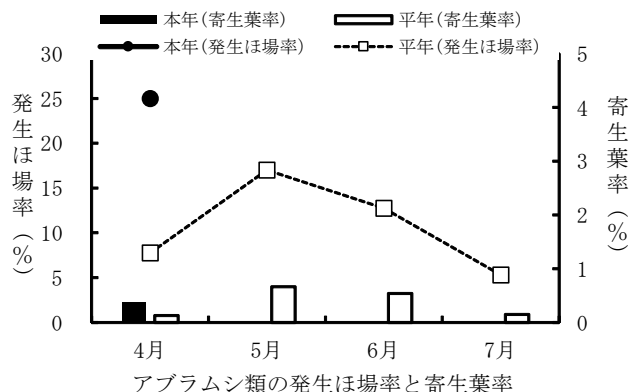
発生程度は低い（-）

(イ) 気象予報

降水量：多い（-）

ウ 防除上注意すべき事項

- (ア) 園地によって発生量に差がみられるので、発生状況をよく把握して防除を行う。
- (イ) 薬剤散布が遅れると縮葉して十分な防除効果が得られないので、早期防除を心掛ける。



V. 茶 樹

(1) チャノココクモンハマキ, チャハマキ

ア 予報内容

- (ア) 発生地域 県内全域
- (イ) 発生時期 並
- (ウ) 発生量 やや少, やや多

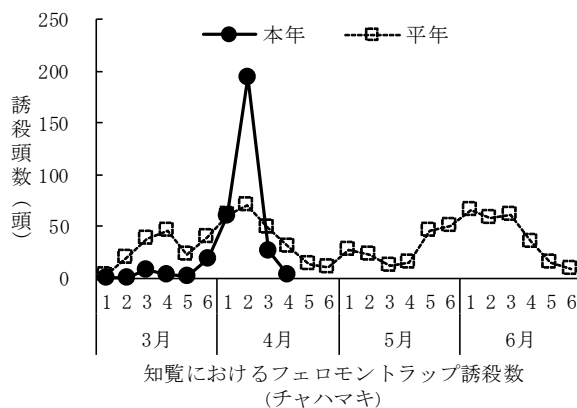
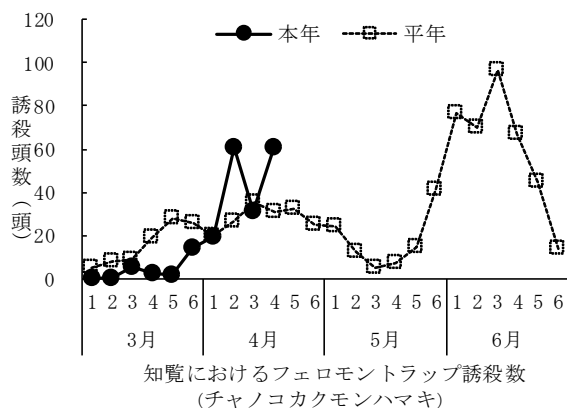
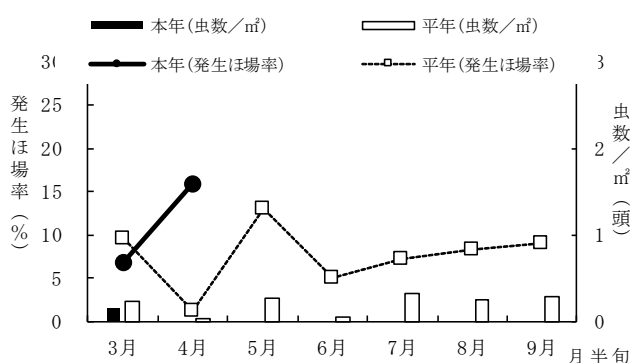
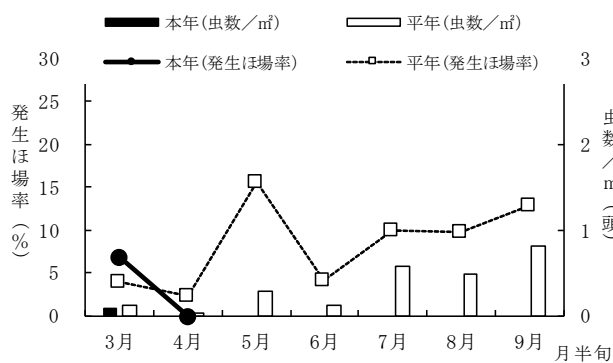
イ 予報の根拠

- (ア) 調査結果

	チャノココクモンハマキ	チャハマキ
【巡回調査】		
発生量	やや少	やや多
発生ほ場率	0% (平年 2%) : やや少	15% (平年 1%) : やや高い (+)
【知覧町フェロモントラップ】		
誘殺数 (3月1半旬~4月4半旬)	195頭 (平年322頭) : 少 (-)	318頭 (平年545頭) : 並 (+)
越冬世代の発蛾ピーク	並	並

ウ 防除上注意すべき事項

- (ア) 防除は、発蛾最盛日をフェロモントラップ等で調査し、若齢幼虫期に行う。
- (イ) 薬剤又はハマキ天敵を散布する場合は、発蛾最盛日から16~22日後に実施する。また、薬剤とハマキ天敵との混用や近接散布を行う場合は薬剤選定に注意する。
- (ウ) 南薩地域の一部でジアミド系薬剤に対する感受性が低下しているのので、地域の栽培暦に従って薬剤を選択する。



(2) チャノホソガ

ア 予報内容

- (ア) 発生地域 県内全域
- (イ) 発生時期 やや遅い
- (ウ) 発生量 並

イ 予報の根拠

【巡回調査】

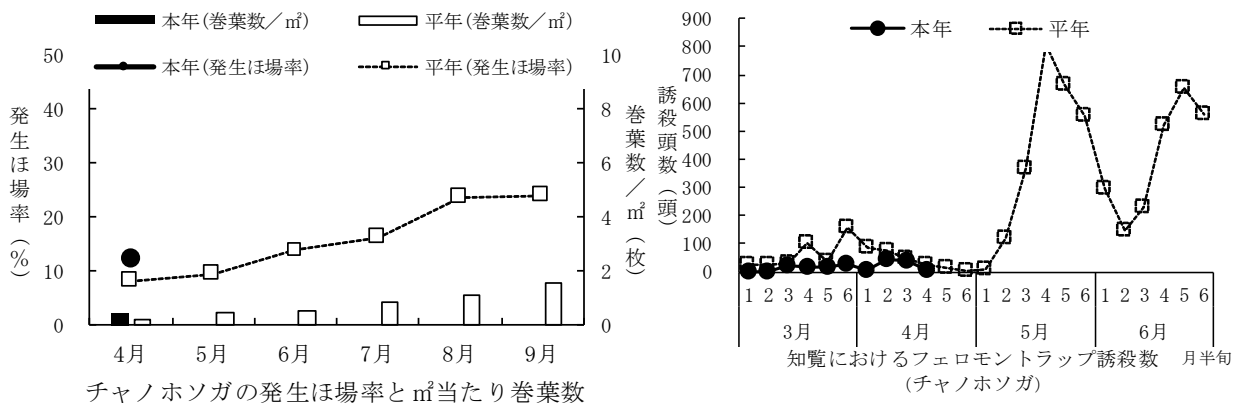
- (ア) 調査結果 発生量：並
発生ほ場率 9% (平年 8%)：並
㎡当たり巻葉数 0.4枚 (平年0.2枚)：やや多 (+)

【知覧町フェロモントラップ】

越冬世代の発蛾ピーク：平年より10日程度遅い。

ウ 防除上注意すべき事項

- (ア) 薬剤による防除は二番茶及び三番茶の萌芽～1葉期に実施する。
- (イ) 第一世代成虫の発生時期は5月上～中旬と予想されるので、この時期に二番茶の新芽生育期が重なる園や品種では、特に被害の発生に注意する。
- (ウ) 萌芽～1葉期頃に葉裏への産卵や幼虫の潜葉を確認してから散布すると効果的である。
- (エ) 二・三番茶期は、萌芽から摘採までの期間が短いので、薬剤の使用時期（摘採前日数）に注意する。
- (オ) IGR剤及びジアミド系薬剤に対する感受性が低下している地域があるので、地域の栽培暦に従って薬剤を選択する。



(3) チャノミドリヒメヨコバイ, チャノキイロアザミウマ

ア 予報内容

- (ア) 発生地域 県内全域
- (イ) 発生量 チャノミドリヒメヨコバイ 並
チャノキイロアザミウマ やや少

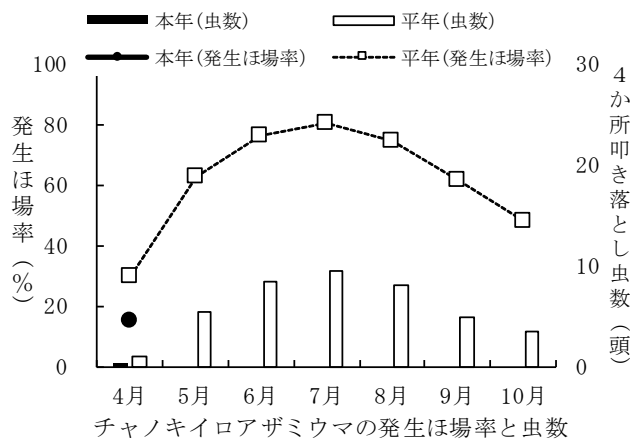
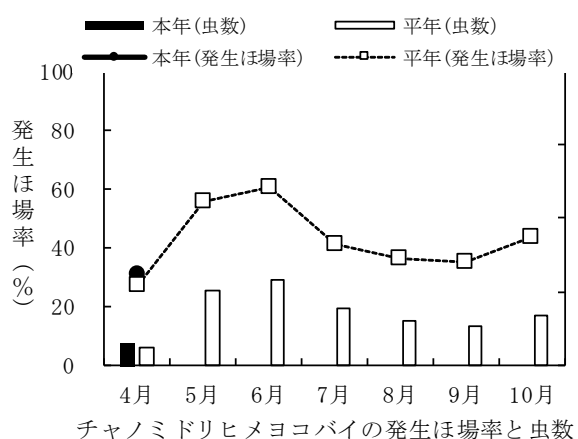
イ 予報の根拠

- (ア) 調査結果(4月中旬)

	チャノミドリヒメヨコバイ	チャノキイロアザミウマ
【巡回調査】		
発生量	並	やや少
発生ほ場率	26% (平年 27%) : 並	13% (平年 30%) : やや低い (-)
虫数(4か所たたき落とし)	0.6頭(平年0.5頭) : 並	0.3頭(平年1.0頭) : やや少 (-)

ウ 防除上注意すべき事項

(ア) 薬剤防除は二番茶及び三番茶の萌芽～1葉期に実施する。



(4) カンザワハダニ

ア 予報内容

(ア) 発生地域 県内全域

(イ) 発生量 並

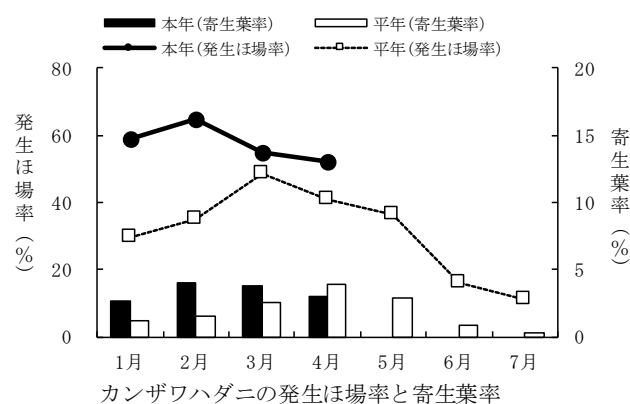
イ 予報の根拠

(ア) 調査結果 発生量：並

発生ほ場率 42% (平年41%)

：並

寄生葉率 3.0% (平年4.0%)：並



ウ 防除上注意すべき事項

(ア) 天敵の働きが活発になる時期なので、天敵に影響の少ない薬剤を選定する。

(イ) 発生が多いほ場では、一番茶の刈番茶摘採後に防除する。

(ウ) 薬剤は、裾部・葉裏に十分にかかるよう留意して散布する。

(5) クワシロカイガラムシ

ア 予報内容

(ア) 発生地域 県内全域

(イ) 発生時期 並

(ウ) 発生量 並

イ 予報の根拠

(ア) 調査結果 (令和3年10月)：並

発生ほ場率 38% (平年49%)：並

寄生株率 18.8% (平年20.8%)：並

(イ) 有効積算温度による防除適期（第一世代ふ化最盛期）予測

地 点	ふ化最盛期		
	本年	(参考) 前年	前々年
枕 崎	5月1日	4月12日	4月27日
加世田	5月3日	4月17日	5月1日
溝 辺	5月16日	5月9日	5月19日
鹿 屋	5月6日	4月24日	5月7日
志布志	5月7日	4月25日	5月7日

注1) 本年の予測には各地のアメダス観測地点における日平均気温を用い（4月24日まで）、4月25日以降は各観測地点の平年値を用いた。

注2) 有効積算温度は、発育零点10.5℃、1月1日を起算日として積算した。

注3) 現地ほ場の気温は、アメダス観測地点より低い場合があり、上記の予測日より数日遅れる可能性があるので注意する。

ウ 防除上注意すべき事項

(ア) ふ化最盛日は地域によって差があるので、ふ化状況を調査し、ふ化最盛日を把握する。

(イ) 薬剤は、ふ化最盛日から5日以内に枝や幹に十分かかるように散布する。

.....
防除に関する今月の留意事項

1 チャトゲコナジラミ

県内全域で発生がみられ、多発ほ場も確認されている。多発するとは場一面に成虫が乱舞し、作業性を低下させるほか、幼虫が寄生した枝ではすす病が発生し光合成能力を低下させる。

- (1) 薬剤防除は効果が高く、天敵のシルベストリコバに影響の少ないアプロードエースフロアブルを使用し、若齢幼虫期に散布する。
- (2) クワシロカイガラムシのふ化最盛期に比べて、チャトゲコナジラミの若齢幼虫期が遅い地域も認められるが、第一世代のクワシロカイガラムシふ化最盛期と本虫の若齢幼虫期はおおむね合うので、同時防除を行う。
- (3) 幼虫は葉の裏のみに寄生し、裾部と葉層下部に寄生が集中することから、薬液は葉裏にかかるように10a当たり400ℓを丁寧に散布する。また、裾刈りは本虫の除去効果と葉裏への薬剤付着性が高まり効果的である。
- (4) 中切り等による更新を行うと、本虫の密度低減が図られる。

2 農薬の使用について

農薬の使用にあたっては、収穫前日数を守り、収穫前の隣接茶園へのドリフトがないように十分注意する。

農薬の適正使用について

農薬は以下の点に注意して適正に使用しましょう。

1. 使用前にラベルや説明書をよく読む。
決められた対象作物・使用時期・回数・使用濃度等を守り，記載された用途，方法以外では使用しない。
2. 使用する農薬にあわせて，適切な防除衣，保護具（マスク・手袋など）を着用する。
3. 散布前には防除器具の整備・点検をする。
4. 体調がすぐれないときは散布作業を避ける。
5. **散布時には薬剤がほ場の外に飛散したり，流出したりしないよう十分注意する。**
6. **クロルピクリン剤は，住宅地および畜舎に隣接するほ場や，無風の時，土壌が乾燥しているときは使用しない。注入後は直ちに穴をふさぎポリエチレンフィルム等で10日以上被覆する。**
7. ランネート剤は毒性が強いので，施設内や噴霧のこもりやすい場所では使用しない。
8. 使用期限の切れた農薬，不要になった農薬および使用済みの空容器は適正に処分する。
9. 農薬は食品と区別し，鍵をかけて保管する。
10. 農薬の散布記録をつけておく。

「予報の根拠」の記載方法

- 調査結果の発生量は，前月の巡回及び定点調査による。
- 野菜類共通病害虫の発生量は，各作物での発生量やトラップ調査結果等を総合的に基づいた総合評価。
- 発生ほ場率と調査場所を記載しない発生数・発生率は，巡回調査の結果。
- 果樹と茶樹の定点防除園又は無防除園は，果樹部と茶業部での調査結果。
- 調査結果や気象予報等の末尾の（＋），（－）は，発生量の増加，減少要因を示す。
- 気象予報は，向こう1か月の長期予報。
- 平年値は原則として過去10年間の平年を用い，本年調査値の後に（平年〇〇）で表記する。ただし，過去3年間の平均値を用いた場合は（過去3年〇〇）と表記する。